

しょうしんげ 「正信偈」のおはなし②

今日は年に一度の報恩講でございます。

報恩講とは、皆様もよくご存じのように、浄土真宗の開祖であられる親鸞聖人の祥月命日である11月28日の前後に、お念仏する心と阿弥陀如来のお救いを教えてくださった親鸞聖人のお徳をたたえて、ご恩を感謝するために行われる法要のことです。

正信寺では、毎年11月23日の勤労感謝の日にお勤めさせていただいています。

本願寺第三世の覚如上人が親鸞聖人の三十三回忌に『報恩講私記(式)』を書かれたのが起源だそうで、それ以来700年以上、親鸞聖人のお命日の頃に報恩講がお勤めされるようになりました。浄土真宗のお寺では、一年の最後で最も大事な重い法要です。

今日お称えしたのは、「伽陀」の後、「正信偈」の真四句目下とって、普段お称えする正信偈の読み方とは少し違う、重い法要のときにお称えする読み方です。

それに続いて、念仏と和讃は五洵という、こちらも重い法要でお称えする読み方でした。

和讃の最後は、「恩徳讃」でも歌われる、「如来大悲の恩徳は 身を粉にしても報ずべし 師主知識の恩徳も 骨をくだきても謝すべし」という言葉で終わります。

そして「廻向」の後、最後に親鸞聖人のご生涯について書かれた「御俗姓 御文」を拝読いたしました。これも通常の法要でお読みする御文よりも長く、また重々しく読まれるものです。

さて前回は、「正信偈」の説明と、「正信偈」の最初のところをお読みしました。

「正信偈」は親鸞聖人が書かれた『教行信証』の行巻の最後に収められている讃歌で、実はお経ではなく「偈」すなわち漢詩です。

お釈迦様が説かれた『大無量寿経』の教えに対する親鸞聖人の感動が、七高僧を通して受け継がれてきたことが、1句7文字、120句の偈文に書かれています。

冒頭2句の「総讃」と、前半の「依経段」と後半の「依釈段」に、おおまかに分けられます。

前回は、阿弥陀如来がまだ仏になる前、法蔵菩薩という名前の菩薩として世自在王仏のところで修

行していた時に、すべての人々を救いたいというお誓い、すなわち48の本願を、五劫という長い

間思惟されてたてられ、名号を選ばれて、阿弥陀如来という仏さまになられたというお話でした。

阿弥陀如来という言葉は、古代インドのサンスクリット語のアミターユス・アミターバという言葉から来ています。アミタというのは、限りがないという意味です。アミターユスは限りないいのち、アミターバは尽きることのない光、という意味です。ですから阿弥陀如来という仏さまは、永遠のいのちを持ち、無限の光を放つ仏さまです。

今回は、その阿弥陀如来のお徳のはたらきを十二種類の光で表して、ほめたたえる言葉から始まります。前半の「依経段」の途中、「普放無量無辺光」から後を読んで味わってみたいと思います。この「十二光」は、阿弥陀如来の別の呼び名として、『大無量寿経』にも書かれています。

「十二光」とは、次の十二種類の光のことをいいます。

- ① ^{むりょうこう}無量光 ② ^{むへんこう}無辺光 ③ ^{むげこう}無礙光 ④ ^{むたいこう}無対光 ⑤ ^{こうえんのうこう}光炎王光 ⑥ ^{しょうじょうこう}清浄光 ⑦ ^{かんぎこう}歡喜光 ⑧ ^{ちえこう}智慧光
⑨ ^{ふだんこう}不断光 ⑩ ^{なんしこう}難思光 ⑪ ^{むしょうこう}無称光 ⑫ ^{ちょうにちがっこう}超日月光

それぞれの光は、以下のようなものです。

- ① ^{むりょうこう}無量光：量ることのできない光。寿命が無量の光で、過去・現在・未来、いつの時代の人々をもいつまでも照らし続けてくださる救いのはたらきをいいます。これは『大無量寿経』に書かれている阿弥陀如来の四十八願のうち第十二願である、「^{こうみょうむりょう}光明無量の願」からきています。
「光明無量の願」というのは、次のようなものです。

★「光明無量の願」（四十八願の第十二願）

「わたしが仏になったとき、光明に限りがあつて、数限りない仏がたの国々を照らさないようなら、わたしは決してさとりを開きません。」

（^{せつがとくぶ}設我得仏、^{こうみょううのうげんりょう}光明有能限量、^{げしふしょうひやくせんのかなゆた}下至不照百千億那由他、^{しょぶつこくしゃ}諸仏国者、^{ふしゅしょうがく}不取正覚）（『大無量寿経』）

- ② ^{むへんこう}無辺光：空間的に際限のない光。阿弥陀如来の光明はあらゆる世界を照らし、はたらきの及ばないところはないのです。
- ③ ^{むげこう}無礙光：何ものにもさえぎられることのない光。私たちの悪業や煩惱を打ち破り、何ものにもまたげられない光です。
- ④ ^{むたいこう}無対光：くらべるものがない、対比するものがない、ならびなきすぐれた光。他の何ものとも比較のしようがない光です。

- ⑤ **光炎王光**：^{こうえんのうこう} = ^{えんのうこう}炎王光（『大無量寿経』）、最高の輝きをもつ光、光明のなかでもっともすぐれた、盛んな光。仏さまの光明が届かない^{じごく}地獄・^{がき}餓鬼・^{ちくしょう}畜生の^{さんまくどう}三悪道をも照らしてくれる光です。

「正信偈」では、以下のように書かれています。

「普放無量無辺光 無礙無対光炎王」

〈あまねく^{むりょう}無量・^{むへんこう}無辺光、^{むげ}無礙・^{むたい}無対・^{こうえんのう}光炎王〉

《あまねく^{はな}放たれる^{むりょうこう}無量光（^{はか}寿命を量ることのできない光）・^{むへんこう}無辺光（空間的に際限のない光）・

^{むげこう}無礙光（^{なに}何ものにも^{さまた}礙げられない光）・^{むたいこう}無対光（^{ならび}比べるものがない、^{むたい}対なき光）・^{こうえんのうこう}光炎王光（最高の輝きをもつ光）》

その次は、⑥の清浄光からです。

- ⑥ **清浄光**：^{しょうじょうこう}清らかな光。衆生のむさぼりを除いて、心が清らかになるように働きかけてくれます。

^{さんどく}三毒の^{ぼんのう}煩惱（^{とんよく}貪欲・^{しんに}瞋恚・^{ぐち}愚癡）のうち、「貪欲」の心を除いて清らかにしていただきます。

- ⑦ **歡喜光**：^{かんぎこう}歡喜すなわち、よろこびを与えてくれる光。三毒の煩惱のうち「怒り」や「憎しみ」、

すなわち^{しんに}瞋恚の心を除いてくれます。

- ⑧ **智慧光**：^{ちえこう}衆生の無知を除いて、智慧を与えてくれる光。私たちは真実に暗く、愚かで無知そのものです。しかも自分が無知であることもわからないのです。阿弥陀仏は私たちに無知を教え、無知の闇を破ってくださるのです。

三毒の煩惱のうちの「愚癡」すなわち真理に暗く、物事をありのままに知ることのできない愚かな迷いの心を照らしてくれます。

- ⑨ **不断光**：^{ふだんこう}常に照らして、一刻も^た断えることのない光。阿弥陀仏の救済のはたらきが、途絶えることなく常に働いてくださることをいいます。

- ⑩ **難思光**：^{なんしこう}人間の知恵では思いはかることができない光。阿弥陀仏の光明は、仏でなければ思いはかることができない、私たちのような愚かな衆生には知り尽くすことができない光です。

- ⑪ ^{むしやうこう}無称光：説きつくすことができない、言葉も及ばない、^{とな}称えつくせない光、という意味です。私たち人間の言葉では表現できない、はかり知れない働きの光です。

正信偈では、以下のように書かれています。

^{しやうじやうかんぎちえこう}清浄歓喜智慧光 ^{ふだんなんしむしやうこう}不断難思無称光

〈^{しやうじやう}清浄・^{かんぎ}歓喜・^{ちえこう}智慧光、^{ふだん}不断・^{なんし}難思・^{むしやうこう}無称光、〉

《^{しやうじやうこう}清浄光（^{きよ}清らかな光）・^{かんぎこう}歓喜光（^{喜び}喜びを与えてくれる光）・^{ちえこう}智慧光（^{ちえ}智慧を与えてくれる光）、

^{ふだんこう}不断光（^た断えることのない光）・^{なんしこう}難思光（^{おも}思いはかることのできない光）・^{むしやうこう}無称光（^{とな}称えつくせぬ光）》

十二光の最後は、^{ちやうにちがっこう}超日月光です。

- ⑫ ^{ちやうにちがっこう}超日月光：^{にちげつ}日月を超えた、すぐれた光。阿弥陀仏の光明は、太陽や月のはたらきをも超えた、優れた光明なのです。

「正信偈」では、次のように書かれています。

^{ちやうにちがっこうしやうじんせ}超日月光照塵刹 ^{いっさいぐんじやうむこうしやう}一切群生蒙光照

〈^{ちやうにちがっこう}超日月光を^{はな}放ちて、^{じんせつ}塵刹を^て照らす。一切の^{いっさい}群生、^{ぐんじやう}群生、^{こうしやう}光照をこうむる。〉

《^{ちやうにちがっこう}超日月光（^{たいやう}太陽や^{つき}月を超えた光）と^こたたえられる^{こうみやう}光明を^{はな}放って、^{ひろ}広く^{くにくに}すべての国々を^て照らし、

^{しゆじやう}すべての衆生はその^{こうみやう}光明に^て照らされるのです。》

^{じんせつ}塵刹は、すべての国々、という意味です。塵には、小さいこと、よごれ、けがれ、俗世などという意味もありますが、ここでは塵のように小さくてたくさん、という意味だと思います。刹は、国土とか土地という意味です。

^{ほんがんみやうごうしやうじやうごう}本願名号正定業 ^{ししんしんぎやうがんにいん}至心信樂願為因

ほんがん みょうごう しょうじょう ごう ししんしんぎょう がん いん
〈本願の名号は正定の業なり。至心信樂の願を因となす。〉

「本願」というのは、阿弥陀如来がまだ法蔵菩薩だったときに建てられたお誓いで、すべての人々を救いたい、という願いです。

すべての人々が幸せにならない限り、阿弥陀如来もさとりを開くことはない、ということが、48通りに誓われています。

この48のうち、第十八願を根本の願として、絶対他力の信心のよりどころとされました。

第十八願というものは、浄土三部経の中の『無量寿経』(大無量寿経)に出てきますが、現代語訳では、以下のような言葉です。

★「至心信業の願」(四十八願の第十八願)

「わたしが仏になるとき、すべての人々が心から信じて、わたしの国に生まれたいと願い、わずか十回でも念仏して、もし生まれることができないようなら、わたしは決してさとりを開きません。ただし五逆の罪を犯したり、仏の教えを謗るものだけは除きます。」

せつがとくぶ じっぽうしゅじょう ししんしんぎょう よくしょうがこく ないしじゅうねん にかくふしょうじゃ ふしゅしょうがく ゆいじょごぎやく
〔設我得仏、十方衆生、至心信樂、欲生我国、乃至十念、若不生者、不取正覺、唯除五逆、

ひぼうしょうぼう
誹謗正法〕(『大無量寿経』より)

第十八願は「至心信業の願」とも呼ばれ、信心と念仏によって衆生が浄土に生まれることができないならば、私はさとりを開きません、として、人々が浄土へ往生することと、法蔵菩薩がさとりを開くことを誓ったものです。

すべての人々をもらさず救うという阿弥陀如来の根本の願なので、第十八願を特に「王本願」とも呼んでいます。

「五逆の罪」というのは、①父を殺す(殺父) ②母を殺す(殺母) ③阿羅漢を殺す(殺阿羅漢) ④仏の身体より血を出す(出仏身血) ⑤教団の平和を乱す(破和合僧)です。この部分は抑止のために付け加えられたといわれています。

「正定業」というのは、いろいろな修行のうち、衆生が間違いなく浄土に往生するための行のことです。

「至心信業の願」は、第十八願のことです。

ですから現代語訳は以下ようになります。

ほんがん みょうごう しゅじょう まちが じょうど おうじょう ぎょう しょうじょうごう ししんしんぎょう
〈本願の名号は、衆生が間違いなく浄土に往生するための行(正定業)であり、至心信業の

がんに 第十八願に誓われている信を往生の正因とするのです。》

じょうとうがくしょうだいねはん ひっしめつどがんにじょうじゅ
「成等覚証大涅槃 必至滅度願成就」

とうがく だいねはん しょう ひっしめつど がん じょうじゅ
〈等覚をなり、大涅槃を証することは、必至滅度の願に成就したまえり。〉

「等覚」とは「等正覚」ともいい、菩薩の修行の段階のうち、ほとんど仏のさとりに等しいという

意味です。また「正定聚」とも「不退転」ともいいます。

「正定聚」とは、この世で必ずさとりを開いて仏になることが決定している仲間です。

「不退転」は、仏になることに定まり、再び下の位に退転しないことです。

「涅槃」はサンスクリット語のニルバーナの音写で、漢訳では「滅度」といいます。煩惱がなくなった、さとりの境地のことです。

「必至滅度の願」は、『大無量寿経』に書かれた四十八願の中の第十一願のことです。

★「必至滅度の願」（四十八願の第十一願）

「わたしが仏になるとき、わたしの国の天人や人々が正定聚に入り、必ずさとりを得ることがないようなら、わたしは決してさとりを開きません」

せつがとくぶ こくちゅうにんてん ふじゅうじょうじゅ ひっしめつどしゃ ふしゅしょうがく
（「設我得仏、国中人天、不住定聚、必至滅度者、不取正覚」）（『大無量寿経』より）

現代語訳は、次の通りです。

《正定聚（この世で仏になる身に定まったこと）の位につき、浄土に往生してさとりを開くこ

とができるのは、必至滅度の願（第十一願）が成就されたことによるのです。》

にょらいしよいこうしゅつせ ゆいせみだほんがんかい
「如来所以興出世 唯説弥陀本願海」

にょらいよ こうしゅつ ゆえん みだほんがんかいと
〈如来世に興出したもう所以は、ただ弥陀の本願海を説かんとなり。〉

この如来とは、釈迦如来、お釈迦さまのことです。諸仏も含まれているともいわれます。

「本願海」は、阿弥陀如来のお救いが深く広いことを、海にたとえられたものです。

親鸞聖人は、お書き物の中で「海」という言葉をよく使われています。（「正信偈」だけでも、唯説弥陀本願海、五濁悪時群生海、帰入功德大宝海、開入本願大智海、など）

これはおそらく、越後に流されたときに日本海の海を毎日のように眺められたところからきているのではとされます。

現代語訳は、以下の通りです。

《釈迦如来がこの世に出られたのは、ただ阿弥陀仏の本願（第十八願）の教えを説くためなのです。》

「五濁悪時群生海 応信如来如実言」

〈五濁悪時の群生海、まさに如来如実の言を信ずべし。〉

「五濁」というのは『阿弥陀経』にも出てくる言葉で、次のような五つの濁りです。

- ① 劫濁…時代の濁り。戦争や疫病や飢饉、天災などの社会悪が増える
- ② 見濁…思想の乱れ。悪い思想や見解がはびこる
- ③ 煩惱濁…煩惱がはびこる濁り
- ④ 衆生濁…衆生が墮落して人間の資質が低下する濁り
- ⑤ 命濁…衆生の寿命が短くなる濁り

この五濁に満ちた悪い世界が「五濁悪世」で、その時代が「五濁悪時」です。

『阿弥陀経』では「五濁悪世」になっています。

「群生海」は衆生のことで、生きとし生けるものを海にたとえたものです。

現代語訳は、以下のようになります。

《五濁悪時の世にあるすべての人々は、釈迦如来の真実のお言葉を信じるべきです。》

今日は、ここまでにさせていただきます。

次回は、もしできましたら依経段の最後までを読んでみたいと思います。

ありがとうございました。